

ある日常

小林ミイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿です。

らんま1／2の乱馬君とあかねちゃんの日常のやり取り。

乱馬君↓あかねちゃん、な感じです。

目次

ある日常

「変質者だあ〜?」

ある日の放課後、授業も終わりそろそろ帰ろうとした時のことだった。

ゆかからの妙な情報に、思わず少し大きな声でもう一度確認してしまふ。

「そ、また例の出たらしいのよ。昨日の夕方。隣町の女子高の子が狙われたらしいわ。」

本当：怖いわあ〜」

側にいた女子どもは、か弱そうにどよめく中、ただ一人我等の英雄…俺の許婚が立ち上がる。

こういうところ、いい加減なんとかなんねえのかな…。
やっぱりというか、ほんと無鉄砲な跳ねつかえりだ。

「そんな奴、あたしがやっつけてやるわっ!」

…あー、言うと思った…。

予想通りの展開にため息をつきながら呆れてしまふ。

正義感強すぎだろ、こいつ。

「あたしがおとりになつてっ」

「誰がおめえみてえな凶暴女を狙うってんだよ」

言い出したらきかないあかねを止める気もなかったけれど、ついつい癖でいらぬ口を挟んでしまふ。

すぐさま繰り出されたあかねの右手は、見事に俺の右頬にヒットする。

くっそ、本当に凶暴女め…。

「怖いから、早めに帰ろうか」

ゆか達女子はそう言い、いつもより早めに教室を出た。

まー、賢明な選択だろう。

…なのに、こいつは…。

一人、机に向かってなにか書き物をしている。

まだかよ…。

とりあえず、あかねの前の席に座って肘をつく。

「おめーは帰らねえのかよ」

「あたし、今日先生から頼まれた資料を提出しなくっちゃいけないくて、まだ終わらないから…」

「……………ふーん…」

それから結構時間がたったけど、終わる気配が見えない。

暇だから今日の学校での出来事とか他愛のない会話をしていた。

すると、突然あかねが何かひらめいたような顔をしてノートから目を離す。

「そうだ！乱馬が4人いたらいいのよ」

前後の会話に何の脈絡ない言葉に、思わず固まってしまった。

…俺が四人？

「…なんだそりゃ」

「だから、それぞれの乱馬が、シャンプーと右京と小太刀と付き合うの。そしたら全て丸く収まるじゃない。

…まあ、お父さんたちの件もあるし、四人目の乱馬はうちに置いてあげなくもないかな」

あかねは話しながら噴き出すように笑う。

唐突に思いついたようで、自分でも変な事言ってるってわかってるみたいだ。

「…ムチャクチャだな」

「まあ、乱馬は今のこのモチモチな状況を楽しんでるんでしょうけど…。

いつも巻き込まれるあたしの身にもなってよ。」

「あのな、俺は楽しんでねー、苦しんでんだ」

「…どうだか」

嫌味か、それは。

まったくかわいげのねえ。

「さてと、やっと終わった！

乱馬、帰ろう」

あかねはそう言い、職員室に早々と駆け足で駆け込んで言った。

先に玄関に行くと、もうほとんどの生徒が帰ったのがわかる。

そして夕焼けを横に、二人歩いた。

それにしても、腹がへったな。

あかねが遅くならなきや、うっちゃんとかかジャンプの店に飯食いに寄ってもよかったかな。

…あ。

こういうところが、あかねから見て「楽しんでる」になっちゃうのかな。

…しっかし…。

「…あー、俺が四人ねえ」

「なによ突然。さっきの話？」

「よくよく考えると、全然丸く収まらねえなって思ってたよ」

「えー、なんで？」

あかねは、うっちゃん達それぞれに言うけど、きっと俺が何人

いようが絶対に幸せになれねえのは目に見える。
だって、その全ての俺ら皆があかねに惚れちまうのが分かるから
だ。

俺は譲る気なんかさらさらねえからな。

「…きつと俺同士で喧嘩始めるぜ」

俺がそう言ったら、あかねは呆れたように笑い出した。

「本当にアンタは格闘バカね」

…。

いや、色恋沙汰での喧嘩なんだけどな。

…ほんとに鈍感だな。

「ねえ乱馬…」

「ん？」

あかねの足が突然止まる。

振り返ると、柔らかな笑顔のあかねがいた。

「…あたしが終わるの待っててくれたんでしょ？」

「べつつに、そんなんじゃねえけど」

照れちまって、それだけ早口で言うので精一杯。

願望や欲求は人一倍あるんだけど、なあ。

「変質者事件があったから、心配した？」

…わかってんじゃねえか。

…つか、なんでこいつこんなに勝ち誇ったような顔してんだよ。
なんか、むかつく。

「は？だから、そんなんじやねえって。変質者だって、襲うんならもつと可愛げのある女を狙うんじやねえの？」

「失礼ね、見た目じゃ凶暴なんて分からないでしょっ」

「おめえ自分が可愛いとでも思ってるのかよ」

「そうは言っただけでしょっ！」

あかねはそう言って形のいい頬を膨らませる。

予想通りの反応で、思わず笑えてくる。

まー、そんな事件がなくなつたつて遅いから待っててやったと思うけど。

「……ありがとう」

………！

あかねはそういうとふいつと顔をそらして足を速めた。

一瞬の出来事に高速で体が固まる。

……なんだよ、かわいいじゃねえか。

そんなあかねを見て、思わず手を伸ばした。

でも伸ばした手は空をきり、行き場を無くして引いたそれは無意識に頭の後ろに回った。

・手、繋ぎたかったな。

でも、まあ、いっか。

今は…これで。

あかねの笑顔だけで、満足しちまう俺って随分安い男だよな。

それでも、悪くねえかな…なんて思っちまう自分が何だか可笑しくて口元が綻ぶ。

「おい、あかねー。」

「待てよ、襲われんぞー」

少し遠くなったらあかねに、茶化して叫んだら、夕焼けの中に「ぼーか」ってかえってきた。

振り返ったあかねの顔は、オレンジに染まりながらも赤くなっているのがまるわかりだ。

その顔を見たら何だかすごく嬉しくなって、思わず俺も足を速めた。

l e n d .